

氏名	谷本 めい
ヨミガナ	タニモト メイ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第681号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文）石による空間構築への軌跡 - 流転するリズム - （作品）痕跡の海

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	工藤 晴也
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	布施 英利
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小林 正人
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	西村 雄輔
（副査）	東京大学	名誉教授		中田 節也

（論文内容の要旨）

本論文は、私が「石」という素材と出会って以降、壁画技法研究や制作、滞在制作等による実践的な経験を通じ、それまでの絵画表現から石による空間創造へと変容していった表現の軌跡を辿る制作論文である。そして、その新たに試みた空間創造が今後の作品制作の指標となることを目的としている。

私は、身体を通して実感できる体験から創作を続ける中で芽生える発見や気づきに関心を持ち、石や自然を介して生まれる感情や表現に導かれながら制作する行為が何を生むのか思考している。

副題にある「流転するリズム」とは、私の制作理念である。そのリズムとは、自然の循環と私の制作プロセスの循環関係の重なりを示している。それは、「石に寄り添う」ことから始まり、身体を通して「石と対話する」ことの繰り返しによって感じる事が可能となる。

私たち人間は、リズムある日々をそれぞれ過ごしている。そのリズムは生活を乱しかねないが、見方を変えれば世界が拡張し、見えなかったリズムを感じることができるということでもある。例えば、ふと広大な海を眺め、大きなリズムに包まれた時、忙しなく過ぎていた時間の流れがゆっくり変化し、地球の動きさえ感じることができる。朝陽を浴びた時、1日の始まりを感じる。植物の成長に気づいた時、生きるためのリズムをみる。石にまみれ、身を置いた時、石が過ごしてきた途方もない時間（リズム）を感じるのである。

科学技術の発展によって急速に環境が変化し、便利になった現代において「見る」という行為は、視野の狭い観察になる傾向にある。今一度、自然や環境への洞察を深め、見直し、そこに秘められたリズムについて再考するべきである。「石の世界」を通して改めて視野を広げると、表面的な事柄だけでなく、そこに内包された想像を超えた時間や緊張感が明らかになってくる。そして、そこで展開される様々なリズムの断片を繋ぎ合わせ、モザイク技法を用いながら、環境の中で空間構築するという制作の意義をこの論文を通して紐解いていく。

本論文は全3章と、序章、終章を含む構成で論考を進めた。

第1章 「石-痕跡」では、なぜ私が石に惹かれるのか、石と五感の関係や、自然が石に干渉する事柄について例を挙げ、石の魅力について確認した。そして、「石と人」が過去においてどのような結びつきによって共存してきたのか、その変容の歴史を「積み上げる」「彫る」「配置する」「嵌め込む」という観点から、石による美術表現を取り上げ、私の制作と重なる点や石のエネルギーについて考察し、制作する原動

力について述べた。

第2章「流転するリズムとは何か」では、テニスの経験や幼少期の体験を踏まえ原点に立ち返りながら身体運動とリズムの関係性について論じた。そして、「流転するリズム」について思考を始めるきっかけとなった自作《Panta rhey》を基点に、ヘラクレイトスの万物流転説を援用し、「絶え間ない流動」を表現に繋げようと試みた。そして自作《海のゆりかご-耳を澄まして-》では、作品と環境の関係についての気づきがあり、内と外から鑑賞する視点の変化や、屋外設置によって自然のサイクルと作品が共鳴し、多様な石の表情を感じることができた。この経験から西洋と東洋の庭園の在り方、中でも自然と調和を図った「枯山水」に着目した。そこで、他者の作品と、「調和」と「流動」の融和を図った自作《貝底園》とを比較しながら双方に通底する精神性や心理的特徴を分析した。また、石への表現を追求している時、私はある茶室の石に出会った。その石は、人の手が加わっているにもかかわらず、野生美が失われることなく存在し、刻一刻と自然光に揺らぎ変化するリズムに、私は大きな感銘を受けた。このような体験を通し、石が環境と密接な関わりを持ち、如何に土着の文化を生み出してきたのかを探るため、中国敦煌での滞在制作を試み、より実践的な関わりから、作品を構築することへと展開した。その結果、私の制作プロセスが、大地の輪廻図（プレートテクトニクスから見た岩石の地質学的サイクル）に類似することに気づき、双方を比較しながら自作図で関係性を明確にした。更に、人と場の繋がりを探り、新たなアプローチで追求するために滞在制作を重ね、提出作品へと繋げた。

第3章「石による空間構築-博士提出作品《痕跡の海》」では、新たに出会った方解石という素材により、場と関わりながら空間を構築した提出作品の制作工程を解説した。この作品は、山口県美祢市にある大理石鉱山での滞在制作から始まる。先ず、作品素材である方解石の持つ特殊な性質について触れつつ、その特性に寄り添い、土地と石の成り立ちを探った。自らが石を理解していく過程を解析し、変化していくリズムの構造について述べた。次に、方解石を用いた制作が特定の環境の中でどのように場と関わりながら空間構築を試みたのか、その過程を解説した。最後に、《痕跡の海》を通して、石による空間構築が結果として鑑賞者にどのような効果をもたらし、「流転するリズム」が誕生したのかを提示した。

終章では、これまでの道筋を振り返り今後の課題と展望を述べた。

#### （論文審査結果の要旨）

本論文は、石による空間構築の作品に取り組む筆者が、自身の石との出会い、その制作と関わる「身体とリズム」、世界の循環などの観点から美術造形の世界についての考察をまとめたものである。

本論文は三章からなる考察で構成されている。

第一章は、さらに二節から構成され、第一節「秘められたエネルギー」においては石との出会い、五感と石、そして地質学的な観点からの石についての説明がされる。石は、筆者にとって重要な美術の素材であるが、その素材に対して、客観的・科学的な観点からその魅力に迫ろうと試みる。

第二節「石と人」では、「積み上げる」「彫る」「配置する」など、筆者の石に対しての造形的な行為が検証され、加えてモザイク壁画などでの「嵌め込む」美術についても取り上げられる。

続く第二章は「流転するリズムとは何か」で、いわば第一章が素材としての石、物質としての石を取り上げたのに対し、ここでは「流転するリズム」という、世界の背後にあるもの、美術・造形を支えているものへと目が向けられる。筆者のアプローチ法はユニークで、ここでスポーツの「テニス」の話が出てくる。テニスは、筆者にとって美術と並んで、青春を賭けて取り組んできたもので、テニスというものの通して得られる、身体性、リズムなどの感覚は、筆者が熟知したものである。そのテニスで得た知見・世界感覚を、美術に照らしてみようとの試みがされるのだ。筆者のテニスを論じる言葉を追っていると、それがあたかも絵画や立体美術作品における、構図や空間の意味や大切さを語っていることと重なってくる。いわばテニスを通して得た美術観が、この章では展開されるのだ。そしてテニスを通した美術論を出版点として、循環する風景などの大地の輪廻図へと話は終着していく。

最後の第三章は、ここまでの考察をベースにして、筆者自身の作品、博士提出作品《痕跡の海》が取り

上げられる。大学美術館の前庭というか、美術学部の正門を入った広場に、その作品は展示された。石の集合体が、銀河の星たちのように螺旋の渦に磨かれ、近付いて見ると、石には、やはり螺旋の形をしたアンモナイトの化石のようなものが掘られている。この作品は、美術館の建物に面しているため、美術館三階の部屋からガラスの壁越しに、見下ろして鑑賞することもできる。それらはあたかも新石器時代の遺跡が現出したかのような光景でもあり、本論においても「配置と方角」「流転するリズム」など、宇宙的な視点からも造形がされていることが論じられる。

つまり本論文は、博士提出作品《痕跡の海》に向けて、筆者がどのような研究を積み重ねてきたか、しかもそれは単に美術のアカデミズム内部での研究考察ではなく、自然の中での体験、テニスの鍛錬を通しての体験の裏打ちによってなされたものであることが伝えられる。

上記の観点から、本論文は高く評価でき、よって東京藝術大学・大学院美術研究科・博士論文として合格とする。

#### (作品審査結果の要旨)

谷本めいの博士展提出作品「痕跡の海」は美術=石の彫刻が決して美術という専門領域で学んだ技術だけで造型されるものじゃない、という新たな眼を鑑賞者に開かせる作品だった。

石は美術という概念が生まれる前から在る。木は人が家を建てる前からそこに在った。

土、水、火、石…そういった自然物を相手にする時の人間の知恵、技術とはなんだろう？

この技術論を展開するにあたって谷本は博士審査にテニスのラケットとハンマーを持って来た。谷本めいは美術を始める前は日々テニスに明け暮れるテニスプレイヤーだったからだ。

技術とは力だ。力をどう集めてどう使うか？！どう伝えるか？！それを間違えたらボールは思った所に飛ばないし石は割れてしまう。

力は見せつける為のものじゃない、それを身体で解ってる谷本はこの先益々もっともっと石を相手に地球を相手に高い技術を学ぶことが出来るだろう。

我々は博士論文というのは未来に伝えられるものであって欲しいと思ってる。

石による空間構築をテニスと連動して論じたのは多分世界中で谷本めいが初めてだ。

未だ拙かろうがそれだけでこの論文はPHDに十分値する。

#### (総合審査結果の要旨)

2021年12月10日大学美術館において博士論文、提出作品の審査および口述試問による最終試験を行った。本論文は石の科学的性質と人類との関わりに触れながら、石を表現素材とする制作について述べられ、作品は自然界のサイクルに組み込まれることによって完結するという自説を展開するものである。地球規模で繰り返される自然界のリズムを輪廻思想と重ね合わせながら、地質学的メカニズムと自身の感性を独自の循環図に置き換えて論述する方法は極めて独創的である。大陸を身体に、プレートの動きを感情の諸要因に見立て、プレート同士の活動によって起きるエネルギーとそれに連動する様々な物質的变化を自身の制作過程に当てはめ、制作行為が自然界の現象に符合するという持論を展開する。石を彫る運動機能と鑿を通して伝わる情報が感性に変換され作品となるという理論は、日本各地および中国で制作した実体験に基づくもので、相応の説得力がある。第2章では幼少時から登山やテニスに親しんだ記憶が述べられているが、石切り場の中で制作することこそ創作の基本であると述べる通り、大自然を敬愛する姿勢は自身の幼少時から培われてきた感性を理論的に再構築したものと理解できる。

提出作品は、大学美術館屋外スペースに展示されたインスタレーション作品である。彫刻とモザイクを合

体させた作品の素材は、山口県美祢市で産出された大理石で、方形の規則性をもつ透過性結晶体を含み、陽が当たると強く反射する特性がある。

岩石には無数のアンモナイトが彫られ、白亜紀の海底の姿と共に大理石の原初の姿を想像する。彫刻につながる様態で設置されたモザイクは、同質の石を割った部材で作られ、同心円の波紋が広がる海を意味する。この塊を起点として太陽の軌跡を示す円弧が大小の石片によって配置され、南北を中心軸とする渦巻き状の地上絵となっている。その姿はアンモナイトの相似形であり、ミクロとマクロの相関関係を暗示させる。太陽光によって作品は乱反射し、刻々と変わる陽の傾きに従って作品の表情も変化する。作品は自然界のサイクルに組み込まれることによって完結するという作者の制作意図が読み取ることができる。岩石の材質感を生かした表現力と彫刻技術の熟練度、さらには自然への畏敬と共に作品に向かう真摯な姿勢と労力を評価する。

最終試験は、多少知識不足の面が見られたが、概ね許容できる口述内容であり、可とした。

以上の通り、主査、副査5名の審査員は一致して論文、作品共に高く評価し、博士号の授与を認めるものとした。